

「生」か「死」か、グレゴリ夫人の『グローニア』の選択

A Study on Lady Gregory's Tragedy *Grania*—"To be, or not to be" in the case of *Grania*

海老澤 邦江*

Abstract

At the turn of the nineteenth century, Lady Gregory, Yeats and Synge creates the main stream of Irish dramatic movement based on the theatre Abbey. Their common aim to achieve is to establish a national theatre to develop their movement in order to appeal to the public for both political and cultural independence of Ireland. As for the themes for the stage, Irish legendary topics or historical events are preferred. In particular, legendary heroines such as Deirdre or Grania became popular among writers. *Grania* written by Lady Gregory was, however, never performed except one time which was not successful. This essay shows how Lady Gregory struggles to finish writing the Grania's play, and reveals several significant points of view which Lady Gregory intends to express by a comparison with Deidre.

Key words: Irish dramatic movement, Deirdre and Grania, a Tragedy, the Irish legend

1. 文学少女からグレゴリ夫人へ

今から100年ほど前、トーマス・マン(Thomas Mann, 1875-1955)と共に文学賞候補に挙がっていた年の1923年11月にノーベル文学賞受賞の朗報をイエイツは受ける。この前年には、激しい内戦を経ながらもアイルランドは自治を得、「自由国」を樹立していた。イエイツは、自身の文学的業績、政治的には国家独立が公けに認められ受容された成果として、ノーベル賞受賞を喜んでいる。翌12月には、「アイルランド演劇運動」(The Irish Dramatic Movement)と題し、受賞記念講演をストックホルムで行う。スピーチ冒頭で、関わった多くの有名無名の忘れられない人々、「仲間と私が経験した、数々の骨折りと労苦、そして成功や勝利」(the labours, triumphs

and troubles of my fellow-workers)を語りたいとイエイツは講演目的を告げる。⁽¹⁾

19世紀末のパネル(Charles Stewart Parnell, 1846-1891)の失墜以降を現代アイルランド文学創生の起点として、アイルランド独立に関わる文化的運動や諸々の社会的、文学活動の展開を語る。例えば、ダグラス・ハイド(Douglas Hyde, 1860-1949)を中心としたゲール語復興運動、グレゴリ夫人(Lady Augusta Gregory, 1852-1932)との邂逅、夫人の地元ゴールウェイ地方を拠点とし、シングを始め様々な文人や文化人との交流、さらにアイルランドを代表する演劇創生の芽生えと構築の経緯など、およそ30年に渡る体験と出来事、その成果を語り尽くそうとする。講演を締めくくるにあたって、授与された文学上の栄誉をイエイツひとりが占有すべきものではなく、共有すべき存在があることを述べる。

2021年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科教授 英語文学、文化比較

But certainly I have said enough to make you understand why, when I received from

the hands of your King the great honour your Academy has conferred upon me, I felt that a young man's ghost should have stood upon one side of me and at the other a living woman sinking into the infirmity of age. (私が、科学アカデミーから授与された栄誉の賞を国王陛下の御手から授けられた時、私の傍らにある若者の亡霊が、またもう一方の側に老齢の衰弱の淵に苦しむある女性がともに並び立つのが当然と感じたわけを皆さまに十分伝えられたと確信しております。)⁽²⁾

アイルランド演劇の拠点となったアベイ座の誕生からアイルランドを代表する劇場に成長、発展のためにもともに奔走した中心人物として、J. M. シング (James M. Synge, 1871-1901) とグレゴリ夫人に言及した発言である。この発言は、志し半ばに、若くして亡くなったシングを追悼する意図を感じる一方で、老齢から健康を損ないがちなグレゴリ夫人を不快にさせたことでも知られている。だが、実際には、この時期のグレゴリ夫人の肉体は癌に侵されていることがわかり、即刻癌の切除を診断されたばかりで、精神的に大きなダメージに苦しんでいた。そうした事情を勘案した上で、夫人の健康状態を婉曲に伝える表現であったとも考えられよう。

文学研究上のタームとして「アイルランド文芸復興」と称され、主たる活動となった演劇運動の胞子は、サー・ウィリアム (Sir William Gregory, 1817-1892) とイザベラ・オーガスタ・パースが結婚しグレゴリ夫人となり、夫妻の生活拠点、ロンドンのタウンハウスの小サロンに認められる。グレゴリ夫人がホステスを務めたサロンには、イエイツ、ジョージ・ムア (George Moore, 1852-1933) を始め、テニソン (Alfred Tennyson, 1809-1892)、トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928)、またヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916)、マーク・トウエイン (Mark Twain, 1835-1910) など英米の作家詩人、さらにはアメリカ大統領となる政治家のセオドア・ルーズベルト

(Theodore Roosevelt, 1858-1919) も訪れた。⁽³⁾ アイルランドのゴールウェイの館は、夏場を過ごす避暑地として主に利用されていたが、夫の死後は、夫人の管理下のもと広大な領地と館を運営するために、生活と文学活動の拠点となる。そこで絆を深めたイエイツらとの交流から、アイルランド演劇の誕生と劇場創出に関わる具体的なプランが練られる。G. B. ショウ (George Bernard Shaw, 1856-1950) がグレゴリ夫人をアベイ座の「雑役婦」と後年形容し、夫人自身もその自己犠牲を自虐的に認めていたと言われる。⁽⁴⁾ 夫人の財産、健康と人生の大半を捧げ費やすことになる一方で、彼女がアベイ座のパトロネスであると同時に、劇作家としてのグレゴリ夫人を忘れてはならない。

19世紀末から20世紀初頭のアイルランド文芸復興運動に関わる文化・文学上の活動を検討する際、グレゴリ夫人のハブ的存在の重要性は、特に認められていた。ただ、その存在と重要性は、劇作家としての評価よりも、甥ヒュー・レイン (Sir Hugh Percy Lane, 1875-1915) 所有の絵画を巡る司法上の争いを含め、誕生したばかりのアベイ座の経営ならびに運営問題に関わった実業家としての卓越した手腕や、イエイツ、シング、ムア、ショウなどアイルランド文学の隆盛を牽引した数々の劇作家や詩人たちを周りに集めた夫人の社交性や人間性、社会的環境や影響力に関心が傾きがちである。

グレゴリ夫人に関する研究蓄積は、本国アイルランドはもとより英米の優れた多くの研究があり、現在にまで引き継がれている。日本においても、『劇作家グレゴリ夫人』(前波清一著、アポロン社 1987年)がおそらくグレゴリ夫人の劇作を主題とした総合的な研究書の嚆矢と考えられる。その後しばらくの間、グレゴリ夫人に特化した専門研究書が見当たらなかったが、評伝を兼ねた総合的な研究書『レイディ・グレゴリーアングロアイリッシュ夫人の肖像』(杉山寿美子著、国書刊行会 2010年)が出版された。その間には、学会の研究発表を始め、研究紀要等には、グレゴリ夫人に関する数々の論文ならびに研究成果が発表されている。さらに、イエイツ研究を中心に考え

た場合においても、グレゴリ夫人との文学上の影響関係に言及した研究を含めれば、その学術研究上の研究蓄積は膨大な量になる。

一方、イエイツは詩作品にグレゴリ夫人を頻繁に描き、その存在を永遠に留めることに成功したと言えるであろうが、現在の日本においては、グレゴリ夫人の戯曲が紹介されることはない。イエイツとグレゴリ夫人が、国民文学の構築を共通の目的とし、その理想の実現を演劇活動に見出したことは広く認められている。ただ、両者の演劇による表現方法、例えば主題や言語表現、演劇空間に対する考え方には大きな差異が存在した。そもそも、詩人のイエイツと実業家としてのグレゴリ夫人が、互いに持ち合わせていない異質な要素を見出すのは当然であった。それゆえに、グレゴリ夫人はイエイツの示唆を受け入れ、戯曲の完成に関わる最終的な判断が必要な時は、イエイツの判断を優先したと推察される。もともと繊細で夢見がち傾向の詩人氣質のイエイツは、自身が受け入れられない現実からの逃避傾向、不安定な精神状態などを受容してくれる「場」を必要としていた。その場の提供者が、グレゴリ夫人であり、彼女自身が、傷つきやすい詩人の心を癒し滋養を与える地母神のような存在となったとも言えよう。

異質な要素を抱えた両者が、長い期間に渡って関係性を維持し、アイルランドを代表する演劇世界を構築しえたのは、両者の補完し合う特性と関係性が重要な鍵になったと考えられる。本論において、特にグレゴリ夫人が持つ個性を戯曲の中に探り、具体的な戯曲表現としてどのように表わしたかを考察する。そして、その考察を通じて、イエイツの戯曲における表現方法の特徴をも明らかにするつもりである。また、この演劇運動が、グレゴリ夫人のサロンから発し、サロンの「場」の延長上に文化的運動の拠点へと発展し、その場が多様な才能を惹きつけ成長を促す教育の場として変容を遂げた経緯を検討する。

さて、父ダドレイ (Dudley Persse of Roxborough) は、先妻との間に誕生した8人の子供に加え、後妻に迎えたフランシス (Frances) との間には、娘5人息子3人の子供をもうけた。ゴールウェイ

きっての大地主パース家に16人兄妹の中の12番目に生まれた最後の娘は、イザベラ・オーガスタ (Isabella Augusta) と名づけられた。若い頃から車椅子生活を余儀なくされた家長のダドレイと妻フランシスを中心にして子供たちと乳母や召使いが集う、ある夕べの情景が、一幅の絵画のように幸福な家族の肖像を写し出している。⁵⁾ イザベラは、姉妹の末娘として「その誕生をあまり歓迎されなかった幼児は、キルトのカバーに被われたままその存在を忘れられていたため、危うく命を落とすところだった。その際に、母親フランシスの発言として、他の子供たちの遊び相手がいなくなることで落胆するがゆえに、イザベラの死を悼んだであろう」と伝えられ、イザベラへの母親の無関心の度合いを物語っている。

広大な土地を所有し、アングロ・アイリッシュアセンダンシーの古い家系パース家では、肉親の愛情に恵まれなかったイザベラではあるが、満たされない心情を豊かな想像力で補ってくれた人物がいた。それが、アイルランドに伝わるおとぎ話や伝説に通じていた乳母メアリ・シェリダン (Mary Sheridan) だった。彼女は18世紀末にユナイテッド・アイリッシュメンのダブリン協会を創始したハミルトン・ロウワン (Archibald Hamilton Rowan, 1751-1834) 家に仕えていたことがあった。メアリは、伝説やおとぎ話だけでなく、彼女の周辺には、実際にあった警察に追われる反逆者の逃走冒険譚を聞き知っていたので、子供たちからせがまれ、こうした話を語り聞かせていた。幼少時の教育が後のイザベラの人生に大きな影響を与えたことが理解できる逸話である。

この当時のパース家が所蔵する書物は、聖書や宗教関係が中心であった。だが、クリスマスが近づくと、クリスマスプレゼントの習慣で毎年、子ども向けの書物の詰まった本の箱が送られてくることになっていた。子供たちは、自分の好みに応じて本を選び、自分のものにするのができた。ある時、読書に興味を示さない姉が、一番大型の本を選び終えると、テーブルに残されていたのが、2巻本の英文学事典だった。それがイザベラに残され、またその後の人生を導くプレゼントと

なった。

That was to the younger sister the breaking of a new day, the discovering of a new world. She looked forward to those evening hours when she could read those volumes, first straight through, then over and over, a page here and there, till some of the poems given were known almost off by heart. (幼い妹にとって、それは新しい日の始まり、新しい世界の発見だった。彼女は夕方時間の訪れを心待ちにした。その時刻になるとこの2巻本を読めるのだ。まず、最初から通して、それから繰り返し読み、こちらのページを読むと次は他のページという具合に進み進めた。そして最後には文中の詩をほとんど諳んじるようになっていた。)⁽⁶⁾

イザベラの貪るように読む姿が伝えられている。ウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832)、テニソン、ロバート・バーズ (Robert Burns, 1759-96)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88)、アーサー・クラフ (Arthur Hugh Clough, 1819-61)、トーマス・フッド (Thomas Hood, 1799-1845)、キーツ (John Keats, 1795-1821) やモンテーニュ (Michel Montaigne, 1533-92)、マロリー (Sir Thomas Malory, 1408-71) などまず同時代の詩人たちの作品に親しみ、徐々にイザベラの蔵書の増加に伴い、その読書歴と領域が広がってゆく様子が伝えられている。

両親には将来をあまり期待されなかったイザベラであったが、兄リチャードの縁からクールパークの館を初めて訪れ、セイロン総督を務めた、クールパークの当主でユニオニストのサー・ウィリアムと出会う。ウィリアムの求婚を受け入れたイザベラは、大きな人気を博した作家ジョージ・エリオット (George Eliot, 1818-80) の『ミドルマーチ』 (*Middlemarch, a Study of Provincial Life*, 1872) の主人公に自己を投影し、結婚への期待と不安を抱いていたらしい。結婚を控えた初々しい若い女性像は、遡ること100年ほど前の、モンタ

ギユ夫人 (Lady Mary Wortley Montague, 1689-1762) にも共通する姿であった。

結婚後、ヴィクトリア女王への拝謁とヨーロッパ大陸の旅行を無事に終えると、ロンドンの住まいを中心に二人の結婚生活が始まる。都会での社交生活と夫の人脈を通じて、先述したような著名な文化人や作家の知遇を得ると同時に、社交術を身につけることになる。イザベラは、グレゴリ夫妻を訪れた客たちに「完璧なホステス」と称賛されたという。アイルランド西部の地方ゴールウェイで生まれ育ったイザベラが、アベイ座の創建と管理・運営に手腕を発揮できたのは、この都会で過ごした結婚生活から築いた礎があってこそとも考えられる。だが、結婚当初から、必ずしも演劇に親しんでいたわけではなかったようである。

I had never cared much for the stage, although when living a good deal in London, my husband and I went, as others do, to see some of each season's plays. I find, in looking over an old diary, that many of these have quite passed from my mind, although books I read ever so long ago, novels and the like, have left at least some faint trace by which I may recognize them. (ロンドンでかなりの時を過ごしておりましたけれども、私は舞台にそれほど関心があったわけではありませんでした。夫と私は、他の方たちと同じように、そのシーズン毎に話題になるお芝居を拝見しに参りましたが。古い日記を読み返してみますと、こうしたお芝居の多くは私の印象に残っていないことに気づきました。ずいぶん前に読みました本、小説などの類ですが、そうした書物はそれとわかるような、少なくとも微かな名残り、というか記憶の断片を残してくれたのですが。)⁽⁷⁾

実際、イザベラがアイルランドの演劇界の表舞台に立つのは、結婚後10年あまり経った1890年代以降のことになる。それは、夫ウィリアムの、さらに母フランシスの、相次ぐ死によって、ある

いはグレゴリ家の後継ぎとなる長男ロバートが誕生し、その養育目的もあって、主たる居住地をロンドンからゴールウェイに移してからである。

2. 演劇との邂逅—文学者と管理・経営者

イエイツやグレゴリ夫人のみならず、アイルランド社会にとっての転換期とも言えるのが1890年代である。パーネル失墜後も、アイルランドの自治・独立を目標に、これまで以上にナショナリズムと社会変革の気運が高まるのだが、そこに文学文化的運動が加わる。話者激滅の危機にあったゲール語の復興運動を牽引するダグラス・ハイドを中心としたゲール同盟に加えて、イエイツが中核となった文学運動、「アイリッシュ・リヴァイバル」あるいは「アイリッシュ・ルネサンス」の文学活動が後押しをした。これらの文学・文化的運動を牽引する中心人物らが、グレゴリ夫人のもとに集うのは自然な成り行きであった。特にイエイツの場合は、母方の実家がスライゴーにあることから、ゴールウェイ地方には浅からぬ縁があり、アイルランド西部の土地が両者の精神的距離を近づける要因になったと考えてもおかしくない。

グレゴリ夫人は、すでに出版されていたイエイツの『ケルトの薄明』に感銘を受けていた。当時のイエイツが明らかにしていた特長的な考え方のいくつかをここに指摘しておく。というのも、イエイツのアイルランド文学に関わる主張にグレゴリ夫人は賛同していたので、詩人の考えの多くをグレゴリ夫人は共有していたと考えられるからだ。

まず、1893年の「国家的独立と文学」(‘Nationality and Literature’)と題した講演では、種子から大木へと成長する大樹に喩え、文学もまた有機的な発展成長を遂げるとし、その成長段階を、英国文学を実例に挙げながら、まず、第1段階として叙事詩の時代が誕生し、次の段階には演劇の時代、さらに第3段階に到って、抒情詩の時代が訪れると主張する。アイルランドは、自ら気づいていない文学的宝庫を内に秘めていると今後の輝かしい文学開花を予見する。

I affirm that we are a young nation with unexhausted material lying within us in our still unexpected national character… and behind us in our multitude of legends. Look at our literature and you will see that we are still in our epic or ballad period. All that is greatest in that literature is based upon legend— (確信を持って申し上げるが、私たちの国は、今なお、思いもかけない国民性の衣をまとい…私たちの背後ある膨大な伝説に埋もれ、私たちの内に無尽蔵の素材を秘めている若い国です。私たちの文学をご覧なさい。私たちが未だに私たちの叙事詩あるいはバラッドの時代にあるということがわかるでしょう。かの文学で最も偉大なものと言えば、すべて伝説に基づいて構築されているのです。)⁽⁸⁾

樹木の生長過程と英国文学の例を引きながら、イエイツは、国家的独立と精神ならびに文化的成熟と独立を並置し、国民文学の必要性和その構築を主張する。そして、アイルランド文学が、未だ誕生したばかりの段階ではあるが、国民文学として誇れる卓越した文学の礎は伝説にあることを強調している点に留意したい。

さらに1897年に発表したエッセイ「文学におけるケルト的要素」(‘The Celtic Elements in Literature’)にも注目したい。マシュー・アーノルド(Matthew Arnold, 1822-1888)が著した『ケルト文学研究』(On the Study of Celtic Literature, 1867)の誤謬を指摘しながらも、アイルランド文学の可能性を語っている。

I will put this differently and say that… of all the fountains of the passions and beliefs of ancient times in Europe, the Slavonic, the Finnish, the Scandinavian, and the Celt, the Celt alone had been for centuries close to the main river of European literature. (私は、このことについて異なった表現で語

ろうと思う。ヨーロッパでスラブ、フィンランド、北欧、ケルトの各民族の古代における情熱と信念の水源の中でも、ケルトのものだけが、何世紀もの間、ヨーロッパ文学の主流の傍らを流れ続けていたのだ。⁽⁹⁾

アイルランド文学の本源が「ヨーロッパ文学の本流に近い」とイエイツが言うとき、彼の意図する本源とは、古代ギリシアの神々や絶世の美女、英雄が登場し活躍するホメロスが描く叙事詩の世界だった。そこに語られる神話や伝説がプロトタイプとなって、古代アイルランドの神話と伝説が容易にイエイツの想像力の中で結びついていた。

一方、グレゴリ夫人にとってのアイルランドの本源は、幼少時を過ごしたゴールウェイに求められる。豊かで美しい自然に囲まれ、グレゴリ夫人は幸福な幼少時を送る。その生活をおとぎ話の不思議でさらに幸福なものにしたのが (she was happy in being in the care of old Mary Sheridan, the seventh of her nurslings in the house.) 乳母のメアリ・シェリダンで、グレゴリ夫人はパース家におけるメアリの7番目の秘蔵っ子だった。⁽¹⁰⁾ さらに、グレゴリ夫人が当地に伝わる説話や民話を収集した際、忠実に方言(キルタータン語)を解し記録した事実は、ほどなく開始した演劇運動と自身の戯曲テーマの選択の考察を行う場合、検討に加えられるべき留意点であろう。ダグラス・ハイドとの交流からも、ゲール語運動にも共鳴し、自ら言葉の学習を続けていた。方言に対する忠実で真面目に取り組む姿勢は、次の様に描写されている。

In a sense, then, Lady Gregory approached playwritings through the ear, Acting as amanuensis for the peasants on her father's estate, later collecting folklore on her own estates, studying Irish with her son, and faithfully recording the stories and traditions she gathered from the country folk. (ある意味で、その当時、グレゴリ夫人が「耳」から戯曲に近づいた。彼女は父親の

土地で働く農夫たちのために筆記者として腕を振る舞った。後に自分の領地で民間伝承の話を収集、息子とアイルランド語を学習し、グレゴリ夫人がその地方から集めた説話や伝統を忠実に記憶することになる。⁽¹¹⁾

グレゴリ夫人のフォークロアの採集と記録に付き従ったものの、イエイツはアイルランド語を自身の母語とすることはなかった。その一方で、グレゴリ夫人は、ゴールウェイ地方で日常的に使用される言葉(キルタータン方言=ゲール語文法を残す独特の英語方言)で舞台上の登場人物に演技させ、自身の作品にアイルランドの庶民の現実と日常を伝えることに成功した。彼女のキルタータン方言の表現が演出上の工夫を編み出し、舞台世界に現実味を与え、それが巧みに演じられたと評価されている。

But Lady Gregory's use of 'Kiltartan' extended beyond the accurate recording of picturesque phrases and turns of speech picked up in the 'thatched house' where she gathered her folklore and poetry. ...indicates the natural and characteristic language of the peasant whose thoughts flow into easily into hyperbole and similes drawn from the life about him. (だが、グレゴリ夫人の使う「キルタータン方言」は、「茅葺屋根」の下で彼女が伝説説話、詩を収集した美しい言葉遣いや言い回しを単に精確に記録する域を超えていた。...農夫が使う特有、かつ自然な言語を再現し、その農夫の思いが彼の日常から生まれる誇張表現や喩えを使って表現される。)⁽¹²⁾

貴婦人が一般庶民の言葉を能く解し、文学上の言語としても巧みに操る能力は、言語表現に詩人らしい高尚さを求めやすいイエイツ自身の作品もまた、その恩恵を被ることになる。言語リテラシーが十分とは言えない時代、アイルランド文芸復興、具体的には、彼らの演劇運動への理解と支持、援助を得るためにも、活字・印刷文化ではな

い視聴覚文化の演劇に大きな期待が寄せられた。劇作家として書き始める頃の事情について、「戯曲がアイルランドに女優を誕生させ、今度は劇場がさらに多くの劇作家を必要とした」とグレゴリ夫人は発言しており、さらに「求められれば、台詞を少し書き足す程度から始まった」と語っている。⁽¹³⁾

グレゴリ夫人が劇作家としてデビューし、後年、劇作家としての高い評価を認められるのは、総じて庶民を主人公に、当時の庶民の日常性を描いた笑劇であった。それは彼女のキルタータン方言を巧みに駆使できる言語力、並びに幼少時から慣れ親しんだ庶民生活の記憶に負うところが大きかったであろう。登場人物の台詞にその才能を発揮したのが、イエイツの代表作とされる『キャスリーン・ニ・フーリハン』(*Katherine ni Houliha*, 1901)であることはすでに広く知られている。また、地方に伝わる伝説やアイルランド神話をまとめた手腕は散文作家としての才能を示している。劇作家グレゴリ夫人が力を注いだジャンルのひとつは、アイルランドの歴史を題材にした史劇である。だが、それは記録文書の正史あるいは歴史書に残された出来事ではなく、稗史、もしくは口承による歴史である。18世紀以来、ドイツに端を発した口承文学フォークロアの発掘とその文書化の民俗学的姿勢が確立しており、その学究的取り組みが遅れてアイルランドに波及した時代背景も、当時のナショナリズムの高まりとともに、文学的表現化を後押ししたとも考えられる。前波は、グレゴリ夫人の史劇を高く評価する理由として、正史に求められる時代考証、歴史的事実の精確さではなく、民衆による想像力の世界の再現、そこに活々と生きた人間の生活の再現を図ったためとしている。⁽¹⁴⁾

1904年のアベイ座の柿落としから10年近くの時が経過すると、グレゴリ夫人の得意とするキルタータン方言を駆使した農民を主題とした笑劇や短編劇は、一種の型にはまったマンネリズムに陥り、徐々にその新鮮さと活力を失い始める。共に事業を進めていたシングを亡くし、その遺作『哀しみのデアドラ』(*Deirdre of Sorrows*, 1910)を

イエイツと共同して完成させた時期にあたる。これより前に、イエイツは、長年に渡って構想を練っていた『デアドラ』(*Deirdre*, 1906)をすでに発表していた。アイルランド文学の女性主人公を象徴するデアドラの劇制作に深く関わったものの、グレゴリ夫人自身はデアドラの戯曲を残していない。彼女が選んだヒロインは、グローニアだった。

3. グローニアとデアドラ

「ケルト文学がヨーロッパ文学の本流に常に寄り添っていた」と文学的伝統の正統性を古代アイルランド文学に見出し、誇らしげに主張する。そして、ひとつの証しであるかのように、イエイツは、しばしば、トロイのヘレネに比肩するヒロインとしてデアドラに言及する。

…all the august sorrowful persons of literature, Cassandra and Helen and Deirdre, and Lear and Tristan, have come out of legends and are indeed but the images of the primitive imagination mirrored in the little looking-glass of the modern and classic literature. (カッサンドラ、ヘレネにデアドラ、さらにリアにトリスタンといった、文学における崇高な悲劇の全ての登場人物は、伝説から生まれ、まさに、近代と古典文学という小さな姿見に映った、原初の想像力の鏡像であるということに尽きる。)⁽¹⁵⁾

上記のエッセイを発表した1890年代には、デアドラ伝説が『トリスタンとイゼー』(*Tristan et Iseult; Tristan und Isolde*) やアーサー王伝説の騎士ランスロットと王妃グイネヴィアの悲恋物語のモチーフを提供し、悲劇のヒロインの原型が生まれていたことをすでにイエイツは知っていた。1902年には、グレゴリ夫人による『ミュルヘヴナのクフーリン』(*Cuchulain of Muirthemne*) の中に、「ウシュナの子供たちの運命」(Fate of the Children of Usnach) にデアドラの逃避行と悲恋

が描かれている。さらに同年にジョージ・ラッセル (A.E.: George William Russel, 1867-1935) による『3幕劇デアドラ伝説』(*Deidre: A Legend in Three Acts*)、翌03年にフィオナ・マクロード (Fiona Macleod: William Sharp, 1855-1905) による『デアドラとウシュナの息子たち』(*Deidre and the Sons of Usna*) が立て続けて発表されている。このすぐ後に、イエイツの手による『デアドラ』が、1910年には、イエイツとグレゴリ夫人に委ねられシングの遺作となった『哀しみのデアドラ』(*Deidre of the Sorrows*) が上演された。⁽¹⁶⁾ 1910年代の10年間で、キャスリーン・ニ・フーリハンと並んで、デアドラはアイルランドを象徴するヒロインとして舞台に登場する。

さて、デアドラに関わる創作に限れば、グレゴリ夫人の手を加えたものは、アイルランド神話伝説を散文にまとめた部分的な挿話とシングの遺作だけが知られている。デアドラ伝説には多様な変奏があるが、共通したデアドラ像は、支配者の強権に抗い純粋な愛に殉じた美女である。画一的な悲劇のヒロイン像という平凡な印象を免れないが、こうした悲哀を帯びた女性存在は、男性作家の想像力をかきたてる魅力を備えていたのかもしれない。一方、アイルランドの歴史に題材を得て劇作に仕上げた主要なグレゴリ夫人の作品は、『キンコーラ』(*Kincora*, 1905)、『ダヴォーギラ』(*Dervorgilla*, 1907) そして『グローニア』(*Grania*) の3作品に絞られる。

まず、『キンコーラ』は、11世紀、ヴァイキング時代の終焉を告げたクロンターフの戦いを背景に、アイルランド統一を果たした最初の王とされるブライアンを主人公とする。『ダヴォーギラ』は、12世紀のヘンリー2世によるアイルランド侵攻が舞台となる。そして、1909年から翌年にかけて成作された『グローニア』は、正史以前のフィニアン・サイクルの伝説を基にし、アルスター・サイクルのデアドラ伝説を彷彿させる内容を持つ。これらの3作品には、作品間を結びつける要素は見当たらない。これらの作品に共通しているのは、各作品に登場するヒロインが備えているはずの正統派的美徳の欠如であろう。『キンコー

ラ』のブライアン王妃ゴームリース、ヘンリー2世に援軍を要請したダヴォーギラ、そしてフィン王の求愛を退け愛人ディアルミードと出奔したグローニア。これら3人のヒロインたちは、純愛に貫いたデアドラと異なり、裏切りと不貞を働く悪女的資質、ファム・ファタル的要素を包含している。いわゆる、善良で優しき性であるべきヒロインという社会通念へのアンチ・テーゼをグレゴリ夫人は主張していたと考えられまいだろうか。女性性は「家庭の天使」という概念が支配したヴィクトリア朝が終わり、時代のパラダイムが転換する時期でもあった。そのような転換期に合わせたように、アイルランドの文芸復興運動と演劇運動が、新しい時代の到来を告げようとしていたように思える。

デアドラとグローニアは、プロットや物語の性質の観点から比較しても、伝説によるフィクションであり、そのプロットの近似性からも、両者は同等価値を持つ相対的な位置を与えられている。デアドラの場合には、これまでに示したように複数の競作があり、大衆にその存在を印象づけることに成功したと思われるが、グローニアの場合は、逆にデアドラの陰に隠れそのヒロイン性を検討する対象にもならなかったようだ。だが既に、イエイツとムアがグローニアを主人公とする戯曲制作の試みを行っていた。詩人、作家として社会での地位を獲得していた2人が合作するという企画自体からも、グローニアを主人公に据えた戯曲への期待の大きさが想像できよう。だが、才能も文学に対する考え方も表現方法も異なる2人は、創作においては妥協点や合意を見出すことはむづかしく、合作は成立しないばかりか、最終的にはムアが演劇運動から撤退することになる。

…悲恋物語を基にした劇の合作を、ムアがイエイツに提案したのは前年「1899年」の秋、テュリラ城に滞在していた時である。テュリラ城でシナリオが作られ、劇の構成はムア、文体、即ち言葉の表現はイエイツが担う役割分担の下、創作が始まった。…初めから、あまりに異質なムアとの共作はイエイツの芸術

性を損なうと懸念したグレゴリ夫人の不安は、詩人と作家の共同作業は果てしない口論の連続となる。⁽¹⁷⁾

自然主義に傾倒し「アイルランドのゾラ」と称されたムアの表現方法は、イエイツの詩的芸術性を優先する表現方法に譲歩する余地を見出すことはなかった。それでも、グレゴリ夫人や共通の知己アーサー・シモンズ (Arthur Symons, 1865-1945) らが仲裁の労を取り、何とか合作戯曲を完成させる。アベイ座の前身とも言える実験的な上演機会を得て、1901年に『ディアルミードとグローニア』(*Diarmuid and Grania*) は上演された。しかし、その劇評は、アイルランドの英雄伝説が、主人を裏切り駆落ちする不貞を犯した男女の、フランスによくある低俗な物語にすり替えられてしまったという辛辣なものだった。

以降の演劇運動に、シングが加わりアベイ座に新しい魅力を与えたのは周知のことである。当代を代表する詩人と作家の合作が不首尾に終わり、デアドラとは反対に、グローニアはアイルランド伝説の不名誉なヒロイン像に墮してしまっただけかもしれない。グレゴリ夫人は、戯曲創作の動機を次のように書き残している。

I think I turned to Grania because so many have written about sad, lovely Deirdre, who when overtaken by sorrow made no good battle at the last. Grania had more power of will, and for good or evil twice took the shaping of her life into her own hands. (グローニアに私の気持ちが向かったのは可愛そうで美しいデアドラのことはたくさんの方が書いていたからです。デアドラは哀しみに捕らわれ、最後の時には、精一杯戦おうとしなかったからです。グローニアは、もっと堅い意思を持ち、善かれ悪しかれ、2度も自分の人生を自身の手でつかみ取ったのです。)⁽¹⁸⁾

グレゴリ夫人は、人生を戦い抜き、デアドラよ

りも強い意思を持った自律した女性としてグローニアを見なしている。グローニアとデアドラの伝説に共通するのは、親子ほども年が違う、老王に嫁ぐことになっていた美女が、結婚直前に若い騎士と出奔駆落ち、老王から追われるが、最後に捕縛され駆落ち相手の死による悲劇で幕を閉じるという類似したプロットである。特にデアドラの悲劇の構成と悲劇性の特徴については、シングの遺作となった戯曲を含め、拙論でも論じた。⁽¹⁹⁾ここで、イエイツの『デアドラ』とグレゴリ夫人の『グローニア』を比較することで、両者の性質の差異を検討し、その結果、グレゴリ夫人が戯曲のヒロインとしてグローニアを選択した理由を明らかにしたい。

イエイツの『デアドラ』は1幕劇、グレゴリ夫人の『グローニア』は3幕劇、登場人物の配置としては、前者は老王コノハーとデアドラ、後者においては、やはり老王フィンとグローニア、とクライマックスを登場人物2人に絞り焦点を当てている。特に『グローニア』の3幕目は、フィン王とグローニアの独白が交互に繰り返され、あたかも2人の1幕劇の様子を呈している。また内容についても、老王とヒロインが決闘するかのよう、緊張感を漂わせた対話の応酬であるとともに、纏れ合った感情の結び目を解きほぐす心理劇の片鱗が窺える。

デアドラは、ニーシャへの愛を貫くために、自分の行為を悔い老王に身をゆだねるように表向きは見せかけ、実は老王コノハーを欺き、自身の命を絶つ。イエイツが描いたデアドラは、「変節しない典型的なアイルランドの妻」(she was just a good Irish wife trying to keep her man) という平凡なイメージを纏うことになる。⁽²⁰⁾ 倫理的見方を重視するアイルランド聴衆が暴徒化したのを目撃してきたイエイツにとって、デアドラの生き方に、観衆が倫理的危機感を抱くような要素を感じ取ったのかもしれない。演劇運動を成功に導くためにも、そうした危険を冒すのは躊躇われたのは不思議ではない。この躊躇いは、グレゴリ夫人にもあったはずである。だが、シナリオの段階では、グレゴリ夫人は、その壁を乗り越えるよう

に、イエイツよりもさらに踏み込んだ表現と展開を考えていた。

この戯曲は、主題を貫くある特殊な感情によって深く運命と関係づけられた、象徴主義的形式を持つと解釈されている。

The form of *Grania* is almost symbolic...for Love and jealousy play equal roles in this heroic epic tale; and the power of Fate, the 'Woman in the Stars,' is felt throughout this fable of three lovers, 'one of whom had to die'. (『グローニア』の形式は象徴だと言っても差し支えない。…というのも、「愛」と「嫉妬」がこの叙事詩的物語の中で等価の役割を果たしているのだ。つまり、「運命」の力、「星雲の女」が3人の恋人たちの説話を通して感じられ、「その内の誰かが死ぬ運命」にあるのだ。)⁽²¹⁾

さらに、先人の教えとして熱情の嵐の喩えをグローニアに語らせる。

GRANIA I asked the old people what love was, and they gave me no good news of it at all. Three sharp blasts of the wind they said it was, a white blast of delight and a grey blast of discontent and a third blast of jealousy that is red.

FINN That red blast is the wickedest of the three.

(グローニア 私、先人の方々にお伺いしましたの。愛とは何でしょうかと。そうしたら、どなたもはかばかしいお答えをしてくださいませんでした。おっしゃるには、3つの激しい嵐があると。1つに歓びの白い嵐、次に不満の灰色の嵐、そして3つ目は嫉妬の嵐で赤色をしているというのです。

フィン王 その赤い嵐というのが、3つの内で一番厄介なものだ。)

第1幕は、今後の不穏な展開を予感させる内容

が語られるが、その不吉な内容が徐々に明らかにされる。「愛」でそれぞれが繋がる、ディアルミード、フィン王そしてグローニアの3人の三角関係に過ぎないように思われるのだが、グローニアがその関係性を疑う発言をする。ディアルミードの死後、「ディアルミードは、ちっとも私に愛情を持っておらず、むしろあなた様フィン王とともに彼の心があった」('He had no love for me at any time...I would not give in to believe it. His desire was all the time with you yourself...')とフィン王に告白する。デアドラ物語の延長線上に、グローニア物語が描かれたのではなく、むしろその対化の物語であることが判明してくる。

グローニアが老王フィンとの結婚を忌避し、初恋の相手ディアルミードに偶然出会い、出奔駆落ちする。フィン王が送る追手からも逃れ長い歳月が過ぎ去るが、その長い時間を経てもグローニアとディアルミードは夫婦の契りを交わしていなかった。そしてついにフィン王が2人を捕えるが、ディアルミードが命を落としフィン王とグローニア2人が残される。

ここで新たにグローニアによって語られるのは、心地よい情熱、いわゆる「歓びの白い嵐」が3者を結びつけておらず、むしろ憎悪と嫉妬の絆によって強く結ばれていたという真実である。また、さらに続く先人の教えがグローニアの人生に待ち受ける困難に立ち向かわせたとも考えられる。

GRANIA But the old people say more again about love. They say there is no good thing to be gained without hardship and pain, such as a child to be born, or a long day's battle won. And I think it might be a pleasing thing to have a lover that would go through fire for your sake. (グローニアけれど先人の方々には愛についてさらにこうも申しましたわ。おっしゃるには、苦痛や困難なくして得られたものにはよいものは何もないと。例えば、子どもの誕生とか、一日中戦い通した末の勝ち戦もそうです。だから私は

思いました。自分のために炎の中に分け入っていくような恋人を持つのは素敵じゃないかしらと。)

この発言から、デアドラが信じ感じた「愛」とは全く異なる熱情がグローニアを捉えていたのがわかるであろう。互いを信じやり、互いの存在のために犠牲を払うのも厭わないのがデアドラの愛だった。だが、グローニア自身が「愛」の実体を追求するには幼さ、未熟さを内包している。だが、ディアルミードを亡くし、彼の真実の心情を理解し始めたグローニアは、初めてフィン王の言葉に、耳を傾けることができたと考えられないだろうか。

フィン王は、長い歳月を経てようやくグローニアを取り戻したのだが、3者を結んでいた感情、絆をグローニアに説いて聞かせる。

FINN …And now there are but the two of us have been left, and whether we love or hate one another, it is certain I can never feel love or hatred for any other woman from this out, or you yourself for any other man. And so as to yourself and myself, Grania, we must battle it out to the end. (…とうとう今となっては、我々2人だけが残った。互いを愛しいと思うか憎いと思うかわからんが、これだけは確かだ、今回のことで他のどんな女にも愛とか憎しみを感じることはできない。また、お前自身も同じ気持ちだろう。グローニアよ、お前と私に関して言えば、我々は最後まで戦い抜かなければならないのだ。)

打ちひしがれたグローニアは、フィン王に助け起こされる。そして外の歓声に勇気づけられようように、さらに歓呼に応えようと自身を鼓舞して前進する。一度は、扉を開けるよう命じるのだが、道を切り開いた自分自身を象徴的に表すかのように、自分自身で扉を開き人々の前に堂々と進む。そのグローニアを抱くようにフィン王が腕を回

す。それは、新しい女王誕生の姿であった。

アイルランドの神話伝説に描かれた、純愛に命を落とす悲劇のヒロイン像とは異なる女性像をグローニアに見ることができるだろう。それは、強い意思と考えを持ち、諸々の障害を乗り越える胆力と知力を備え、強大な存在に対して立ち向かえる勇気とエネルギーを持つ女性。それも、「生」に対する熱い欲望を持った、生命力をみなぎらせる女性だった。グレゴリ夫人が胸中に描いた理想の女性は、イエイツたちが描き続けた女性像とは全く異なっていた。演劇運動の同志としてともに活動する中で、デアドラでは表現できなかった女性をグローニアに発見し、その斬新な女性像を持った力強いヒロインをグレゴリ夫人は、自身の手によって生み出したと言えるだろう。だが、本作品と同じ観点から検討すべき作品が他に2つ存在する。『キンコーラ』と『ダヴォーギラ』である。それらに登場するヒロインも、グローニアと共通した役割を果たし、その特質を検討することで、グレゴリ夫人が追求していた女性像をさらに明らかにできるであろう。その考察は、次回の稿に譲りたい。

本論は、科研課題番号17K02552「グレゴリ夫人と文芸サロン」基盤研究(C)に採択され、その研究成果の一端である。

《注》

- (1) W. B. Yeats, *Autobiographies* (London: Macmillan, 1980) 559-572
- (2) Ibid. 571
- (3) 『レイディ・グレゴリー-アングロアイルリッシュ夫人の肖像』(国書刊行会) 63~65頁
- (4) 上掲書 343頁
- (5) *Seventy Years 1852-1922* (Guildford: Colin Smythe, 1973) 5-6
- (6) Ibid. p.15
- (7) Ann Saddlemyer, *In Defence of Lady Gregory, Playwright* (Dublin: Oxford Univ. Press, 1966) 10
- (8) W. B. Yeats, ed. John P. Frayne, 'Nationality and Literature', *Uncollected Prose I* (New York: Columbia University Press, 1970) p.273
- (9) W. B. Yeats, 'The Celtic Element in Literature', *Essays and Introductions* (New York: Macmillan, 1961) 185
- (10) *Seventy Years 1852-1922*, 2-3

- (11) Ann Saddlemyer, *In Defence of Lady Gregory, Playwright* 17-18
- (12) Ibid.; 19
- (13) Ibid.; 17
- (14) 前波清一『劇作家グレゴリ夫人』（アポロン社、1988年）71-72
- (15) 'The Celtic Element in Literature' 182
- (16) 拙論「『デアドラの物語』における悲劇の構築」249頁江戸川大学紀要第25号（2015年）
- (17) 杉山寿美子『祖国と詩 W. B. イェイツ』（国書刊行会、2019年）163
- (18) Ann Saddlemyer, ed., *Tragedies and Tragic Comedies of Lady Gregory, Collected Plays 2* (Gerrards Cross; Colin Smythe, 1979) 283
- (19) 前掲拙論、江戸川大学紀要第25号所収（2015年）
- (20) Adrian Frazier, *Behind the Scenes* (Berkeley: University of California Press, 1990) 94
- (21) Saddlemyer, *ibid.*: 66

使用テキスト：

Ann Saddlemyer, ed., *Tragedies and Tragic Comedies of Lady Gregory, Collected Plays 2* (Gerrards Cross; Colin Smythe, 1979)